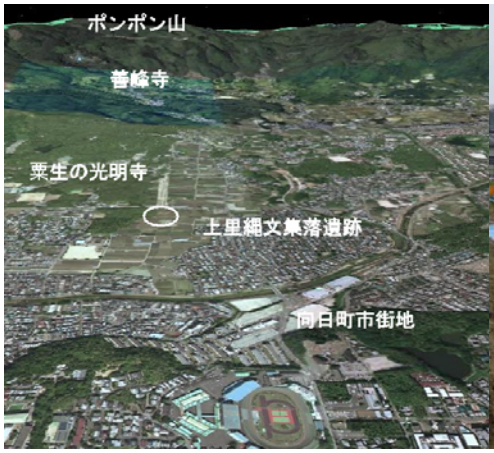
関西の縄文−1

6. 京都　長岡京の北西端に出土した縄文集落　上里遺跡を訪ねて　2007.3.8.

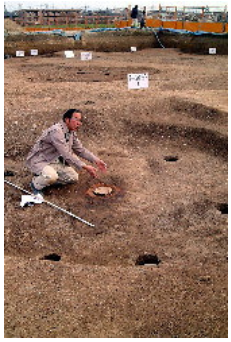
ポンポン山(左)・小塩山(右)北摂連山の山裾の田園地帯の中　上里遺跡がありました　2007.3.8.



南西角より東の方向　集落跡全体を見る　　2007.3.8.

縄文の会で京都長岡京の近くで縄文の集落跡遺跡が出土したと教えてもらって、行ってきました。
縄文遺跡というと東北・北海道そして八ヶ岳山麓など東日本のイメージ強く、西日本の縄文遺跡はほとんど日の目を見ない。「関西にも縄文遺跡があるぞ」とちょっとづつ訪ねたいと思っています。

Mainichi INTERACTIVE　http://www.mainichi-msn.co.jp/chihou/kyoto/archive/news/2007/02/23/20070223ddlk26040469000c.html



竪穴住居跡が見つかった上里遺跡＝西京区で、小川信撮影

長岡京跡・上里遺跡：縄文晩期の竪穴住居跡、６棟確認　柱跡、墓なども　／京都

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は２２日、同市西京区上里の長岡京跡・上里遺跡から、縄文時代晩期中ごろ（約３０００年前）の竪穴住居跡６棟や柱跡、墓などが見つかった、と発表した。埋文研などによると、同時期の住居跡発掘は関西では馬場川遺跡（東大阪市）以来２例目だが、発見棟数が少なく、当時の集落の様子を知る貴重な資料になりそうだ。

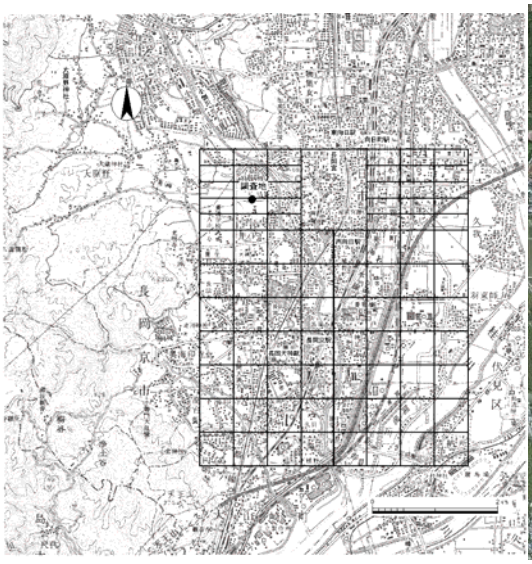
一度に発見された棟数としては関西最大級。住居跡のうち１棟はほぼ完全な形で残った。０２年度から始まった市道新設工事に伴って調査した。

保存状態の良い住居跡は円形で直径約４メートル、深さ約６０センチ。中央部に直径約３０センチ、深さ約１０センチの炉が設けられ、周囲に８本の柱跡があった。室内で煮炊きし暖を取ったらしい。他の住居跡はだ円形や長方形、方形だが、全６棟が同時期の建造かは現時点で不明。出土土器などから今

後調査する。

住居跡近くからは土器の墓跡なども見つかった。同時期の遺跡では、墓跡と住居跡が離れた場合が多く、遺跡の東側に別の住居跡が残っている可能性もあるという。現地説明会は２４日午前１０～１１時。

問い合わせは現場事務所（０７５・３３２・１５１６）。【小川信】毎日新聞　2007 年 2 月 23 日



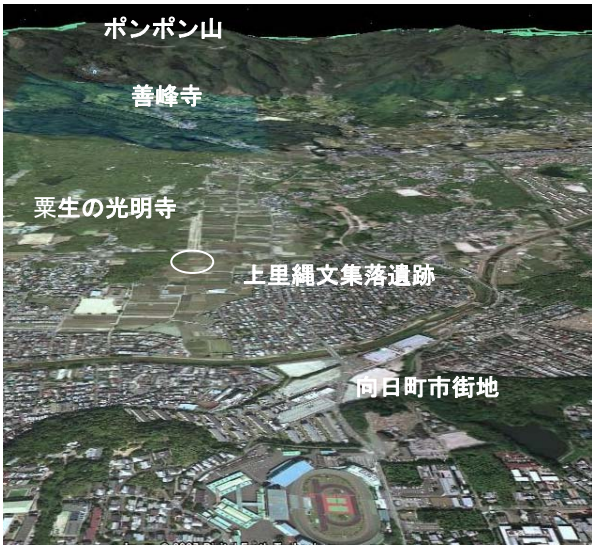
この長岡京の北西端に出土した上里縄文遺跡の記事もちらっと載っただけで、出かけてみないとよくわからない。埋蔵文化財センタの発掘現地事務所に電話して　場所など教えてもらったのですが、製鉄遺跡とおなじで、発掘調査が済むと記録残して　すぐ道路になってしまうという。

「道路になるところを掘っただけで、6 棟も竪穴住居が出た」と聞いて　ひょっとして　縄文の環状集落のイメージが膨らませるかもしれない。地図を調べると良く通ったポンポン山・吉峰寺の山裾の田園地帯。

まもなく調査が終わると聞いて　飛んでいってきました。

■　善峰寺･ポンポン山の麓　善峰川が小畑川に合流する菜の花畑が続く上里遺跡への道

2007.3.8.



阪急東向日町駅で降りて、まっすぐ西へ丘陵地の上にある向町の市街地を抜けてゆく。このあたり南側一体に向日町の市街地がひろがっているのですが、ここにすっぽり長岡京の遺跡が収まっている。簡単な新聞記事と Google earth の空からの写真で見つけた道路工事の写真が頼り。南北に並ぶポンポン山・小塩山を目印に老いの坂から南西へ流れ下る小畑川に西から東へまっすぐ流れ下ってきた吉峰川が合流点するあたりが上里の集落。

小畑川を渡って　吉峰川の南岸に沿って　上里の集落を西へ抜けた田園地帯のところが、長岡京遺跡の条理の西北端　上里遺跡。見渡せば　わかるだろう・・・と。

小畑川を渡って　上里の集落の中を吉峰川沿いに南に抜けた集落のはずれに発掘事務所があり、その向こうには広々とした田園地帯が広がっている。

現地事務所で現地説明会の資料をもらって、遺跡の場所を聞くと　「発掘現場はずっと南東側　すぐ正面の向こうに東西に伸びる丘陵の林の前が計画道路でその一番東の端のところが発掘現場。　もう２･３日で発掘調査が終わるので、少し掘り進んでいたり、現場が変化している」と教えてもらう。

上里の里を流れる小畑川

善峰寺の下からまっすぐに西へ伸びる計画道路　左端が上里遺跡

やっぱり　google earth で見つけた場所である。菜の花畑の広がる畑の中をトラバースして　計画道路の上に出る。ポンポン山の真下のところから東へまっすぐな道が作られつつある。ポンボン山の中腹に吉峰寺が見える。また、丘陵地で見えないが、山のすぐ下の所が粟生の光明寺　ポンポン山の西が小塩山でその下の辺りが、今京都で市街化がもっとも進む洛西ニュータウン　京都大学の洛西キャンパスもここにできつつある。
おそらく　このあたりも　数年後にはぎっしり　家が立ち並ぶ市街地になるのだろう。

暖冬で花が咲いてあわてる食用菜の花栽培

計画道路より西　ポンポン山を眺める
この下にも弥生・古墳・奈良時代の遺跡が眠る

東側計画道路　中央奥が上里縄文集落遺跡

上里縄文集落遺跡

反対側の西側　発掘調査中の道路工事現場が見え、その向うに向日町の市街地　そして　男山・生駒の連山が遠く遠望できる。　この道の下からも長岡京遺跡の痕跡や弥生時代の遺跡が出土し発掘調査されたが、すでに埋め戻されて舗装道路になっている。

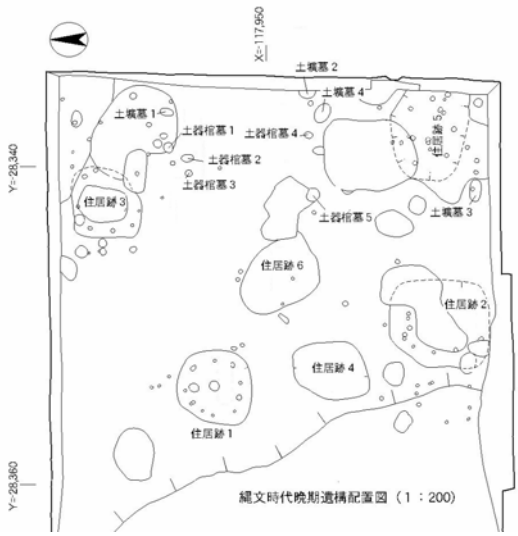
結果的には　上里遺跡は上里集落のもう少し南東側で　西にポンポン山・小塩山の連山を背になだらかな丘陵地が西側へ下って行く見渡すかぎり菜の花畑が広がる田園の中にあり、すぐ西側の市街地の中を北から流れ下ってきた小畑川がある。

「やっぱり、縄文人は見晴らしのいい素晴しい場所に集落をつくった。

　　このまま　この田園地帯とともに遺跡をのこしてほしいなあ・・・・」と思う。

■　上里遺跡　：　縄文晩期の竪穴住居跡が6棟　柱跡、墓なども出土した縄文集落跡

南西角より東の方向　集落跡全体を見る　　2007. 3. 8.



現地発掘中の上里縄文遺跡全体　　上里遺跡　現地説明会資料より

発掘調査の最終段階　多くの人が忙しく計測などを進める真っ最中でした。

現地説明会の資料に書かれた調査図面と発掘現場を見比べながら住居跡を確かめる。

なんせ　６棟も一緒に発見された縄文集落は関西では初めて。集落の中心はどこだろう。もっと南側が集落の中心だろうか･･･かってな想像をめぐらす。調査中の学芸員の人の話によるとまだ、この６棟の住居が同じ時代に並立していたのかどうか　時代の切りあいも含めて調査はこれから。先の道路予定地今後発掘調査するが、集落がどのようにひろがっていたのか・・・はまだまだこれからと聞く。

　道路部分だけでなく　周辺の私有地も含め調査してほしいものであるが、　よっぽど　すごいものが出ないと

だめなのだろう。　この素晴しい田園地帯風景と縄文遺跡　是非とも残してもらいたいものであるが、無理のようだ。せめて　集落の規模　住居の広がり分布ぐらい調べてほしいものです。

北西角より　南東方向　集落跡　2007.3.8.

北側より　東側　集落跡 2007.3.8.

北側より　集落跡遺跡　東側半分　　2007.3.8.

南側より　西側半分　　集落跡を見る

北東の角より西側　集落跡を見る　　南東の角より西側　集落跡を見る

上里遺跡　：　縄文晩期の竪穴住居跡が６棟　柱跡、墓なども出土した縄文集落跡

上里縄文遺跡周辺　　2007. 3. 8.

関西にもすばらしい縄文の集落があった

美しい姿を見せる山裾の丘陵地の田園の中に　広場を囲んで住居が立ち並ぶ縄文の集落が関西にもある

そんな光景をイメージするのですが、無理なのでしょうか・・・・・・・・・

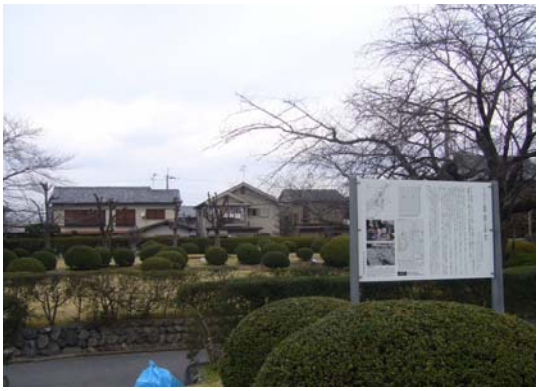
でも　この上里の郷には　縄文時代　そんな縄文の村が広がり、豊かな生活を送っていた。

菜の花咲く田園の中をぶらぶら歩くだけでもたのしい　ゆったりとした時間が流れる上里縄文遺跡探訪の Country Walk でした。

2007.3.8.　ポンポン山山裾の田園の中を歩きながら

Mutsu Nakanishi

■　参考　上里縄文遺跡の東に広がる向日町の市街地に　旧長岡京がすっぽり　収まっています



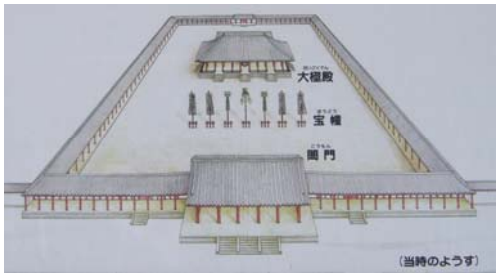
長岡京は、今から約１２００年前の日本の首都です。延暦３（７８４）年から延暦１３（７９４）年までの１０年間ではありますが日本の中心がこの町にありました。

この地周辺は、当時の都の中でも最も重要な場所で宮城といい、現在の国会議事堂に相当します。

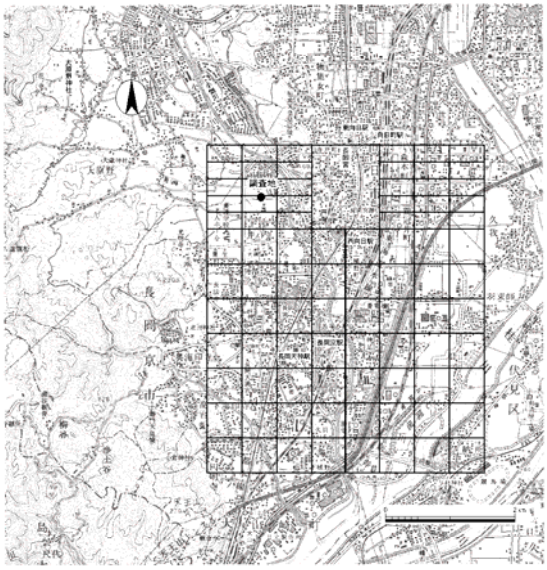
大極殿は天皇が政治を行うところ、宝幢は元旦の儀式の時に立てる旗、閤門は大極殿の正面入口にあたります。

向日市では、これらの地域を国から「長岡宮跡」として史跡指定を受けて買上げ、史跡公園として整備を行っています。

わがまちの文化財を大切に守っていきましょう。



上里遺跡発掘調査現地説明会資料



２００７年２月２４日(土曜日)

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所 在 地：　京都市西京区上里南ノ町、長岡京市井ノ内北裏
調査期間：　2006年６月12日～継続中
調査面積：　940㎡

はじめに

この調査は、2002年度から継続して行っている道路（伏見向日町線）新設工事にともなうものです。

調査では、まず長岡京期の道路・建物などを発見しました。その下の層から、弥生時代の墓などを発見し、さらに、その下から縄文時代の集落や墓を発見しました。

調査の概要

縄文時代の遺構は調査区の東半分で発見しました。検出した遺構は、竪穴住居跡・柱跡・墓・土壙などです。遺構の年代は、出土した土器から縄文時代晩期中頃(今から約3,000年前)とみられます。

竪穴住居跡は、６棟発見しました。住居跡１は、円形で直径約４ｍ前後（床面積12.5㎡）、深さ約0.6m。床の中央には、炉が設けられています。壁際には、柱がめぐります。また、この住居跡内からは、石皿や磨（すり）石が出土しました。住居跡２は、方形と考えられますが、東側は検出できませんでした。住居跡３は、不定形で柱跡が認められます。住居跡４は、楕円形で南北が５ｍあり、床面積は約14㎡あります。住居跡５はほとんど削平されていましたが、柱跡を円弧状に検出したことから住居跡と考えました。住居跡６は、現在調査中です。

調査区の東端北側で３基、南側で２基の土器棺墓を発見しました。墓は、径0.5m前後の穴の中に深鉢（甕）を斜めに据え、深鉢（甕）の破片や鉢で蓋をしていました。これらの土器棺墓は、子供を埋葬したものとみられます。土壙墓は４基発見しましたが、規模や方向にばらつきがあります。土壙墓１・３・４からは土器が出土しています。

出土遺物

出土した縄文土器は、粗製の深鉢（甕）がほとんどですが、表面を磨いた精製のものも少量ですが出土しています。さらに、朱を塗った土器も数片出土しています。また、石製品には石斧、石鏃、石棒、石剣あるいは石刀、砥石、磨石、石皿、敲き石あるいは凹石などがあります。また、石器を作るさいに必要な石片を取るための石核や石屑が多数出土することから、集落の中で石器を作っていたことがわかりました。

まとめ

この集落は、小畑川の河岸段丘に営まれていました。これまで、乙訓地域では縄文時代の住居跡が散見されていましたが、今回の調査では、まとまって発見することができました。しかも、住居跡１は極めて残存状況が良く、発見例が少ない縄文時代晩期の住居のようすを明らかにすることができたことは大きな成果です。さらに、朱を塗った土器の発見は、他地域との交流を示しています。

なお、住居や墓が同時期にあったかどうかは、出土した土器などを今後さらに詳しく調べる必要があります。

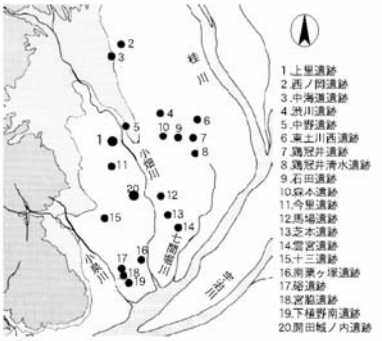


図１　乙訓の縄文時代晩期の遺跡分布図（1/100,000）
（「京都盆地の縄文時代遺跡分布図」『先史時代の北白川』の一部を編集）

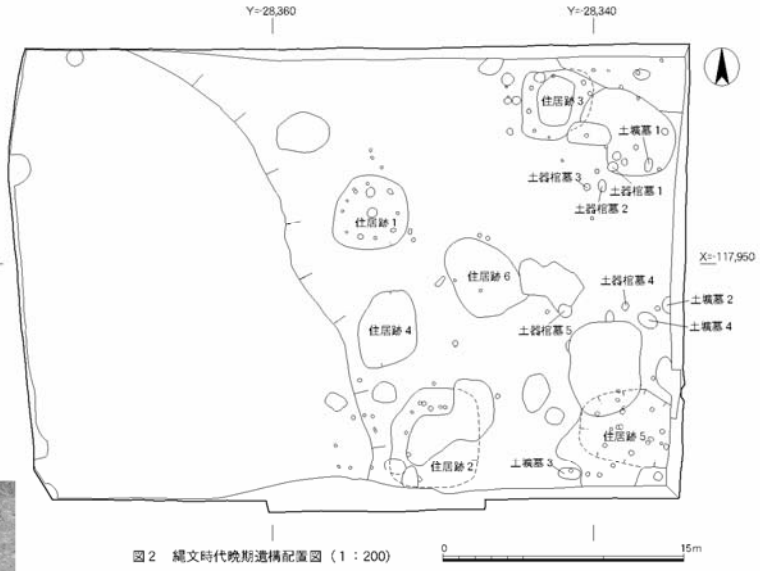


図２　縄文時代晩期遺構配置図（１：200）

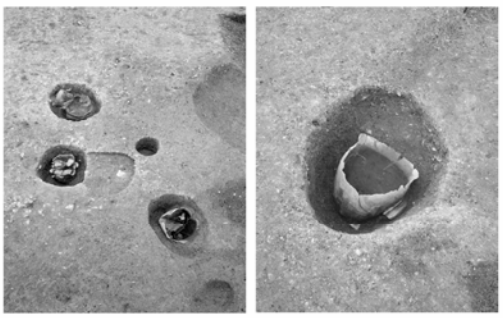


写真　縄文時代晩期の土器棺墓

写真　調査地全景（西より）